

In "Poisonous Fungi in Japan" Gakken, Giappone, 2004, le foto delle pag. 36, 37, 41, 90, 122, 233 sono di Carmine Lavorato



copertina del libro



アライロカラカサタケ



ドクキツネノカラカサ



### ハラタケ科

#### イロカラカサタケ 栗色唐傘茸

*Lepiota castanea*

林内の落葉上、または地上に発生する。茎で、細かい黄褐色～赤褐色～黒褐色くぐれて覆われるが、ひびわれたところの白色が現れる。最初円錐形で真ん中につき出しており、のちに平らに開くが、つき出したままである。ひだは黄白色～オレンジ色のしみを帯び、柄に對して。肉はほぼ白色で、味は特でない。下同大または下に向かつて少し太まり、臍状またはクモの巣状のつばを持つ。下部には赤褐色～暗褐色の繊維状鱗片。小型のカラカサタケ類は猛毒成分が多いので、注意が必要である。腹を持つきのこは食用にしない方がよ

#### 毒成分

不明

#### 中毒症状

アマニタトキシソによるものと同様の中毒症状を示す。タマゴテングタケ (p 20) の症状を参照。

### ハラタケ科

#### ドクキツネノカラカサ

毒狐唐傘

*Lepiota helveola*

#### 毒成分

アマトキシソ類

#### 中毒症状

タマゴテングタケ (p20) と同様の中毒を起す。非常に毒性が強い。

夏～秋、雑木林、林縁の草地などの地上に発生する。傘は小型～中型、平らな山型～中央がやや高い山型。傘の表面は幼菌では全体が赤紫褐色の鱗片で覆われる。成熟すると中央部が赤紫褐色～赤褐色の表皮に覆われ、その周辺では表皮が割れて鱗片となり、白っぽい地肌の上にはほぼ同心円状に散らばる。ひだはほぼ白色で密生し、柄に離生する。柄には膜質の壊れやすいつばがあり、つばから上はほぼ白色、つばからは淡紫褐色の菌糸状の鱗片がまだらになって付着する。肉は白色で特別なにおいはない。本種によく似た猛毒のきのこに、レピオタ・ヨセランドイ *Lepiota josselandii*、レ・アウタムナリス *Lautumnalis*があるが、国内未記録である。

*Lepiota castanea* e *Lepiota helveola* a pag. 36 e 37



ヒメアジロガサ



センボンイナメガサ 8.19 北海道 夕張市



### フウセンタケ科

#### ヒメアジロガサ 姫網代傘

*Galerina marginata*

夏～秋、主として針葉樹林の朽木や落葉などに群生する。傘は小型～中型、開くとほぼ平らになる。表面は黄褐色で周辺部にはかすかに条線がある。乾燥すると水分を失って淡色となり、乾燥が進むと全体が淡黄土色になる。ひだは黄褐色、幅狭く密でふちは白。柄は上下ほぼ同じ太さで下部ほど濃色となる。膜質のつばがあるが成熟時には消失することが多い。センボンイナメガサは全体的な形態や発生状態が本種とよく似ているが、つばから下の柄の部分にざざくれた上向きの鱗片があることで本種と区別できる。また、食用にされるナラタケ (p102) やエノキタケも本種と似ているので、これらと間違えないように厳重な注意が必要である。

#### 毒成分

アマトキシソ類

#### 中毒症状

タマゴテングタケ (p20) と同様の中毒を起す。非常に毒性が強い。

**日本で未記録の毒きのこ(1) -カヤタケ属の毒きのこ- 上田俊徳**

カヤタケ属のきのこにはひだが生じて柄に上生~垂生し、成熟すると傘の中央がくぼみいわゆるカヤタケ属のきのこを作るものが多い。国産のこの属には有名な毒きのこであるドクササコ、酒類と一緒に食べると強い二日酔いの症状を起こさせるホテイシメジをはじめ、いくつかの毒きのこが知られている(84~86ページ参照)。しかし全体としての調査はまだ十分ではなく、名前がわからないものも多く含まれている。ヨーロッパや北アメリカにもこの属には数種の毒きのこが知られている。比較的最近、菌類研究の先進国フランスで、ドクササコと同じような中毒症状をあらわすきのこも見つかっているという。わが国には、残念ながらいまだに間違った毒きのこ区別法が流布しているようであるが、その区別法によれば、カヤタケ属の多くが「酸味な色合い」と「縦に裂けやすい」という特徴もち、名前がわからないまま食べてしまう可能性もある。

この写真のきのこはクリトキーベ・テアルパータ *Clitocybe dealbata* という毒きのこである(和名がないので学名をカタカナで表記する。クリトキーベはカヤタケ属を表す)。いまのところ日本で採れたという記録はないようであるが、人の知らないところで発生しているかもしれない。このきのこを含む白いカヤタケ属のなかの一属には有毒のものが集まっているようである。たとえばクリトキーベ・グラミニコーラ *C. grammicola*、クリトキーベ・ヴェレノウスキイ *C. velenovskyi*、クリトキーベ・フィロフィラ *C. phyllophila* 等がある。本書でも扱ったシロヒメカヤタケ、コカブイヌシメジもその仲間である。

さて、クリトキーベ・テアルパータはムスカリシを含み、神経系の中毒を起こさせるので、誤って食べることのないよう特徴を略記しておく。

草地や芝生に発生する。傘は小型、幼時周辺は内側に巻き込む。表面は白色~クリーム色でややまだらになることもあり。成熟するとほぼ平らに開き中央部がやくぼむ。周辺は波打ったり切れ込みがあることもある。ひだはほぼクリーム色。幅狭くやや密で柄に上生する。小麦粉臭がある。

日本に未記録の毒きのこは、研究が進めばいずれ発見され、記録され、発表される日がくるだろう。しかしそれを持たず、よくわからないきのこを曲や偽った見分け方で食べてしまうということは、たとえ中毒しなくてもやめるべきではないだろうか。



日本ではまだ採取の記録がない *Clitocybe dealbata*

Clitocybe dealbata a pag. 90






モリハラタケ 9/27

春~秋に、林内地上に発生。傘は中型で、最初帯灰色、のち黄白色の地色に細かい褐色鱗片を付け、まんじゅう型、のちほとんど平らに開く。ひだは最初類白色、淡紅色を経て暗褐色となり、密、雑生する。肉は傷つけると赤変。柄は白色で、上部につばがあり、ほぼ上下同大である。

**毒成分**

アマトキシン類  
 <その他の化合物>ベータニトロアミノアラニン、N-ニトロエチレンジアミン

**中毒症状**

毒成分としてアマトキシンが微量検出されるので注意を要する。タマゴテングタケ(p22)の症状を参照。

---

**ハラタケ科**

**モリハラタケ** 森原茸 マグソタケ(秋田)  
*Agaricus silvaticus*

122 観察 撮影 日時 ( ) 場所 ( )

Agaricus sylvaticus a pag. 122



フクロシトネタケ

ノボリリュウタケ科

### フクロシトネタケ 袋袴茸

*Discina perlata*

#### 毒成分

不明

#### 中毒症状

悪寒、胃痛、嘔吐、下痢、唾液分泌などの胃腸系および神経系の中毒を起こす。

春～初夏に、広葉樹の腐朽材上に少数群生または単生する。きのこは中型～大型で、皿形、太くて短い柄がある。椀ははじめ内側に強く差くおわん形、のち開いて皿形になるが、ふちは内側に曲がる。椀の内側（子実層面）は波状にうねるかまたはしわがあり、赤味を帯びた褐色、外側は淡色。柄は太く短く、椀のしわひだがある。十分に成熟した個体の子嚢胞子は、楕円形で両端に典型的なくちばし状突起を生じ、また表面にはいは状突起があるが、未熟な胞子では確認できないので注意が必要である。顕微鏡的には類似種との区別は容易であるが、外見が類似するオオシトネタケなどとしばしば混同されることがある。この写真はイタリヤ産のものである。

観察 撮影 日時 [

] 場所 [

] 233